

がっこうぐらし 龍を宿
す中学生

北方守護

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時……日常が壊された……

そして、その世界に

目次

第1話	ハジマリ	1
第2話	イドウ	7
第3話	カクニン	12
第3話	カクニン (裏)	17
第4話	ソレカラ	20
第4話	ソレカラ (裏)	24
第5話	ジツケン	28
第6話	メザメ	35

第1話 ハジマリ

ある日の昼間……

1人の青年がショッピングモールの中を歩いていった。

「えーつと……今日の買い物は……うん忘れ物は無いな」

《そうだな……それにしても武昭も、この世界に慣れて来たな》

彼は1人しか居ないが誰かと話していた。

彼の名前は龍舎^{たつびや} 武昭^{たけあき}と言い本来はこことは違う世界の人間だった。

そして彼は、その体の中に本来居た世界において破皇龍^{はおうりゆう}デイストカイゼルドラゴン、通称デイスと呼ばれる存在を宿していた。

「それは、そうだろ、この世界に来て10年になるんだから」

《そうだったな……》

「さてと、そろそろ「離して下さいー!」ん?何か騒ぎがあつたみたいだな」

武昭が声のした方に行くと2人の女子高生が数人の男達にナンパされていた。

「見たからには無視出来ないよなあ……はいはい、お兄さん達、嫌がつてるからやめた方が良いでしょう?」

「ああ？ガキが俺達に意見するって言うのか？」

「それとも、この嬢ちゃん達の知り合いか何かか？」

「意見と言う程でもないですし知り合いでも無いですけど、嫌がってるのを分からない人達が、ちよつとね」

「うるせえガキだな……じゃあその口黙らせてやるよ！」

「ふう……先に手を出したのはそつちですからねっ！」

男の1人が殴り掛かって来たが武昭は、それを避けるとその場でバク宙をして男の顎に蹴りを加えて気絶させた。

「なっ!?そいつは元ボクシング部だったんだぞ！」

「そうなんですか？まあボクシングを昔やってたとしても鍛えてなきや意味は無いですけどね……」

「さあ……まだやりますか？」

「くっ！テメエら!!帰るぞ!!（なんだ、あのガキの迫力は!?!）」

男達は気絶した男を担ぐと、慌ててその場から離れた。

「うん、これで大丈夫だな、それじゃ「ちよつと待つて！」ん？」

武昭が離れようとした時に茶色の髪をハーフアップにした女子高生が声を掛けた。

「えつと……何か用でも？」

「ううん、何で私達を助けてくれたのか気になったから、声をかけたの」

「そんな事ですか、俺はただあんな奴らが気に食わなかったからですよ」

「え？ たった、それだけで？ 他には無いの？ ……あなたもアイツらと同じ事をするから助けたのかと思っただけど……」

もう1人のパールホワイトのショートの女子高生が話しかけて来た。

「俺が？ そんな事したらアイツらよりもゲスイ考えじゃないですか、まあ2人は可愛いから、そう思うのも分らないでも無いですけど……」

(ねえ、美樹……彼って普通に私達の事を褒めてるみたいだけど……)

(うん……そう言ってるって気付いてないみたいだね……圭)

武昭の言葉を聞いた2人はひそひそ話をしていたが頬が軽く赤かった。

「それに……俺って2人よりも年下ですから」

「ん？ 年下？」

武昭の言葉を聞いていた2人はある単語が気になった。

「ええ、2人の制服を見て気付いたんですけど巡ヶ丘の生徒ですよね？」

「そうだよ私は2年生の祠堂^{しどう}圭^{けい}で」

「私は圭のクラスメイトで直樹^{なおき}美紀^{みき}って言います」

「先輩達でしたか俺は巡ヶ丘中学3年の龍舎武昭って言います」

互いに自己紹介をした時に武昭が自分達よりも年下だった事に驚いていた。

その後、武昭は圭と美紀「2人から名前で呼ぶ様に言われた」と一緒にモール内を歩いていた。

「それにしても武昭君て体大きいね」

「ええ、こんな図体だから年上に見られがちなんですよ」

「うん……それは私も分かる……」

「それにしても先輩達は何でこんな時間にここにいたんです？普通なら授業だと思うんですけど……」

「ああ、それは今日は短縮授業だったの、それでここに来たの」

「ちようど買いたい物もあったから……武昭君は？」

「そう言う事ですか 俺も買いたい物に来たんですよ、それで「キャンキャン」ん？」

鳴き声がしたので足元を見ると茶色い毛の子犬がじやれていた。

「うーん、どうしたんだお前？ 飼い主さんはどこだ？」

「あつ、この子つて……ちよつと、やっぱりそうだ」

武昭が構っていると何かに気付いた圭が抱き上げて確認した。

「知ってるんですか？ 圭先輩」

「うん、私達がここに来た時にお婆さんが連れてたの」

「そうですか……じゃあ、その人の所に『イヤアア!!』なんだ!今の声は!」

「2人共!あそこ見て!!」

武昭が犬を抱きかかえると同時に叫び声が出たので周りを見ると吹き抜けから下の階を見た圭が何かを見つけた。

それは見た目からも普通とは違う異形の人間が普通の人間に襲い掛かる風景だった。

「ひっ!?な、何なの?アレは……」

「おいおい何処のB級ホラーだって言いたいけど……どうやら現実みたいですね」

武昭が周りを見ると異形の存在「ゾンビ」が囲んでいた。

「うーん、どうしようかなあ……(デイス、何らかの術式反応は?)」

《我は何も感じていないぞ……という事は……》

(術式じゃなくて、細菌やウイルスって事だな……とりあえずは……)

武昭はデイスと話しながら状況を確認していた。

「圭先輩、コイツお願いします」

「え?う、うん……けどどうするの?武昭君」

「まずはここから逃げようかなあって考えてるんですけど」

「どうやって!逃げるの!?こんな状況なんだよ!!」

武昭から子犬を預かった圭がどうするか聞いたので答えると、それを聞いた美紀が涙目で怒鳴りつけた。

「大丈夫ですよ、俺が2人を守ってみせます……所で先輩達は高い所とかは平気ですか？」

「え？私は平気だよ」「私も問題無いです」

「そうですか、先に謝っておきますね！」

「ふえっ!?!」「な、何を!?!」

武昭は2人を脇に抱えると吹き抜けから落ちない様に設置されてる枠に足を掛けた。

「こう………するんですよ!!（肉体強化!!）」

「フワツ!?!」「うそっ!?!」

武昭は、そのまま足に力を込めて上の階に飛び上がった。

「やっぱり下の方は避難する人達とゾンビ達が混み合ってるみたいですね」

「そうだね………それよりも………」

「武昭君が凄いのは分かったけど上に来てどうするの?」

「大丈夫ですよ、ちゃんと考えがありますから」

武昭は2人を抱えたまま最上階を目指した。

第2話　イドウ

モールの最上階に來た武昭達は屋上に出ていた。

「うーん、やっぱり屋上まで來ると人もいないな」

「それも、そうだけど……ここからどうするの？」

美紀が武昭に尋ねた。

「とりあえずは、どうなってるか状況確認したかったんですよ……どうやら街のあちこちで騒ぎが起きてるみたいですね……ほら」

「あの煙って……まさか？……」

武昭に促されて様子を見た圭は色々な所から黒い煙が上がっているのが見えた。

「ええ、アイツら……まあゾンビで良いですね、ゾンビになった人達と逃げようとした人達とで事故が所々で起きてるみたいですよ……」

「なんで……なんで、こんな事に……私達、どうしたら……」

「美紀、大丈夫だよ……」

「ええ、さつきも言いましたけど俺が2人を守ってみせますよ、この3人で唯一の男ですからね」

「う、うん……ありがとう……武昭君……」

「じゃあ、まずは……ここから降りないとダメですね」

「そう言えば武昭君についてきて……うん連れてこられて屋上まで来たけど、どうやってここから降りるの?」

「え? そんなのここからですけど?」

武昭が普通に親指で隣のビルの屋上を指したのを見た美紀は何か気付いた。

「武昭君?……もしかして、ここから隣のビルに飛び移るんじゃ……無いよね?」

「はい、そうですね……よく分かりましたねって、それ位しか無いか」

武昭は答えながら体をほぐしていた。

「いやいやいや! 確かに近くにはあるけど、どうやって行くの!?!」

「見た所、ロープみたいな物も無いですし、あつたとしても向こうで止める人がいないですよ」

「いや、別に道具は使わないですし、2人は何もしなくて平気ですよ よいしょつと」

「何もしないでつて? えっ!?!」

「武昭君!?! 何をするの!?!」

圭と美紀は武昭の脇に抱えられて照れていた。

「よーし、お前はここにいろよ」「キャン」

武昭が胸元を開くと子犬が飛び込んで来た。

「さーてと、そう言えば2人は絶叫マシンとかって好きですか？」

「私は、それでも無いかな？」

「私も……そんなには……って何で、そんな事を……まさか？」

美紀は武昭が屋上の端から下にあるビルの屋上を見ていた事に気付いた。

「先輩の考えてる通りですよー！」

「「キヤーツ!?!」」「キヤーン!!」

武昭が屋上から飛び降りると2人と一匹が悲鳴を上げた。

(デイス！肉体強化！及び重力操作!!)

(ああ、とつくにしている……だが……)

(そうだな……かなりの数のゾンビがいるな……)

武昭はデイスと話しながら街中の様子を確認していた。

「ふっ！おっと、ここは屋上にもいたみたいだな！せきえんさんか赤炎散火！」

「え？炎……どうやって？……」

「話は後にしてください、とりあえずはゾンビ達がいらない場所まで移動します！」

圭は武昭が火の弾を出してゾンビ達を燃やした事に驚いていたが、武昭はそのまま隣のビルの屋上から屋上を飛び移っていた。

「このまま街中にいてもゾンビ達のせいでゆっくり出来ないっすね」

「それも、そうだけど……武昭君は……大丈夫なの？」

「ええ、これ位で疲れるほどヤワな体じゃないんで……とりあえずは2人を休ませるのに安全な場所に向かいます」

「うん分かったって……なんで圭は普通に話してるのかなあ!？」

美紀は武昭に脇に抱えながら話してる圭に大声を上げた。

「ん? いやーこうしてるのにも慣れてきたみたいなんだー」

「俺が言うのも何ですけど……かなりいい性格してますね」

「そうかな……それにしても、何処に向かつてるの? 武昭君」

「向かつてるのは俺の家ですよ……ホラ、あそこですよ」

武昭が視線を向けた方を見ると一軒の日本家屋が見えた。

「あそこが武昭君の家なの?」

「ええ、詳しい話は到着してから話します……ねっ!」

武昭は自分の家の近くまで来ると、そのまま庭に着地した。

「さてと到着しましたけど……2人は大丈夫ですか?」

「私は何とか……けど美紀は……」

「すみません……少し休ませてください……」

「キャウーン……」

「ええ良いですよ部屋まで案内します」

圭は美紀に寄り添いながら武昭に案内されて家に入った。

第3話 カクニン

武昭の家に到着した3人と一匹は部屋で休みながら状況確認をしていた。

「さてと……まずは何をやるにしても腹拵えですね、圭先輩は料理つて出来ますか？」

「うーん自信は無いけど何とか出来るかな？」

「そうですね、なら美紀先輩にあっさりした物を作ってください、俺はがつつりした物を作りますんで」

「ええ、良いわよ「キャン！」分かってるわよ、ちゃんとアナタのも作つてあげるから」

圭は子犬の頭を撫でると武昭と一緒に台所に向かった。

一方……

「うん……あれ？ここつて……そうだ確か武昭君の……「あっ起きてたんだ美紀」圭……」

圭が目を覚まして状況確認をしていると土鍋を持った圭が部屋に来た。

「丁度良かった、はいお粥を作ったから食べて」

「うん……ありがとう……美味しい……」

「良かった、私が作ったんだけど口にあつて」

「そうなんだ……そう言えば武昭君は？……」

「あつ、起きたんですね美紀先輩……悪いんですけど、ここで一緒にご飯を食べさせてもらいます」

美紀が圭に尋ねると武昭が料理を持って部屋に入ってきた。

「うわあ……これって全部武昭君が作ったの？」

「ええ……とは言っても簡単な物ばかりですけど……圭先輩も食べましょうよ」

「うん、じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな……武昭君、テーブルは何処？」

「ああ、すみません。その壁に立て掛けてありますんで出してください」

「これだねって……もしかしてこれって卓袱台って奴？」

「結構大きいし頑丈なんで使ってるんです」

圭が卓袱台を出したので武昭が料理を並べ終え、それから食事を開始した。

「うわっ！この煮物凄いい味が染みてる！」

「それは冷蔵庫に入ってた奴を温め直しただけですよ。美紀先輩も食べれるなら、どうぞ」

「分かった……なら私もいただくね……うん、この天麩羅もカラッと揚がってる……」

その後、3人は食事をしていった。

食事を終えて……

「さてと、これからの方針を話したいんですけど……俺としては……ゾンビ達の調査をした後に違う場所に移動した方が良いと考えてます」

「いやいやいや！それよりも、もっと話す事があるよね（でしょ）!!」

「え？違う話す事って……ああ、なんでこんなに体が大きいのか……」「武昭君……おふざけは止めようか？」は、はい……」

軽くふざけていた武昭は圭と美紀の迫力に顔を青くして震えていた。

「じゃあ聞くけど……武昭君が出していた火の弾って何だったの？」

「うーん……詳しい話は今はまだ話せないですけど……簡単に言うなら魔法……ですね」

「今はまだ話せないって……いつかは話してくれるって事？」

「はい……これは俺の中での整理と言うかケジメが着いたら話すので……お願いします……」

武昭が土下座をしようとしたのを圭と美紀が止めた。

「良いよ、そこまでしなくても……」

「うん、私達は武昭君に助けてもらったから……だけどいつかは話してね？」

「はい、分かりました……じゃあ、これからの方針はさつき俺が言ったので良いですか？」

「そうだね……移動するにしても、ここに残るにしてもゾンビ達の行動が分からないとダメだからね」

「そう言えば……武昭君のご家族の方達は……心配じゃないの？」

「ああ……俺に家族はいないですよ……」

その言葉を聞いた2人は「えっ？」とした表情を見せたが武昭は、そのまま話し続けた。

「俺が赤ん坊の頃に、この家の前に捨てられていたのをこの爺さんが拾ってくれたんです……」

けど、小学生の頃に婆さんが、中学の時に爺さんが……それから俺は一人で住んでるんです」

「そうなんだ……ごめんね話したくない事聞いちゃって……」

「気にしなくて良いですよ、いつかは話す事ですし……それに俺が覚えてる限り爺さんと婆さんはココで生きてますから」

武昭は親指で自分の胸を指した。

「そうなんだ……武昭君で強いね……」

「本当に私達より年下なんて信じられないよ……」

「まあ、一人暮らししてれば、そうなつてきますよ……さてと夕飯も食べたから風呂でも

入ったら、どうですか?」

「え? 武昭君はどうするの?」

「俺はちよつとやる事があるから後でいいです」

「そうなんだ……じゃあ私達先に入るけど……着替えが……」

「うーん……あつ、2人に合うかどうか分からないですけど……婆さんが昔着てた奴が
ありますよ?」

「今の状況じゃ有るだけマシかなあ……」

「だと思ふよ圭……なら武昭君、何処に有るか教えてくれる?」

「ええ、こつちの部屋になります」

武昭は2人を連れて部屋に向かった。

第3話 カクニン（裏）

夕食を終えて圭と美紀が用意された部屋に向かったのを確認した武昭は座っていた。

「ふう……どうやら2人は眠ったみたいだな……デイス」

《ああ、その様だな……まああの様な事が起きて何処か疲れていたのだ……》

「当たり前だ……この世界じゃ、本来はあんなゾンビみたいな奴は存在しない筈なんだからな」

武昭は体を解すと庭に出た。

「デイス……やっぱ俺たち以外の魔力反応は感じないか」

《うむ、何処から感じはしない……やはり、このゾンビ達は魔力とは違う方法で発生した物だ》

「そうか……なら、ゾンビになった、貴方達には悪いですけど……始末させてもらいます
破龍武装はりゆうぶそう」

武昭がそう言うのと胸部、両手足に龍の鱗がデザインされた防具が装備された。

「デイス、今日の相対時にゾンビ達が火に弱い事は分かったから、今回は他に何が通じるかの確認だ」

《そうだな、我がいた世界ではアンデッド系には光系や聖属性の攻撃に弱かったがこの世界は……》

「まあ、やってみれば分かるさ……じゃあ行くぞ！」

武昭は庭の壁を乗り越えると近くにいるゾンビ達に向かっていった。

「火はよく効いたから次はコイツらを試してみるか！」

アクアボール^{水弾}！

ストーンバレット^{石弾}！

ウツドスピア^{樹槍}！

ウインドカッター^{風刃}！

シャインキューブ^{光賽}！

ダークスラッシュ^{闇斬}！

ホーリークロス^{聖架}！

武昭はゾンビ達に近づくとあらゆる属性の魔法で攻撃を加えた。

《ふむ……それなりに通る攻撃はあるが一番効くのは炎系魔法の様だな》

「デイスの言う通りか……それと！「グシャ！」頭を碎けばイチコロって所か」

武昭は一体ゾンビに近付くと、そのまま頭部を破壊した。

《そうだな……それにコイツらは生前の動作を続けているみたいだ》

「それと……サウンドボムピーーツ!!音と光に反応するんだな!」

武昭とデイスは話しながらゾンビ達を始末していった。

「それと……これも調べてみないとな……アナライズ……^解析……どうやら何らかのウィルスみたいな物が混入してるな」

武昭は落ちていたゾンビの腕を魔法で変異した理由を調べていた。

一方、武昭の家の一室で布団に入った美紀と圭が起きていた。

「ねえ美紀……起きてる?」

「うん……何だろう……体は疲れてるんだけど……何か眠れないんだ……」

「そう、私も同じ気持ちだよ……武昭君で……ううん私達を助けてくれた……ただそれだけの事だよな?」

「圭の言う通りだよ……だから武昭君が自分の事を話してくれるまでそばにいようよ」

「私達が居なくなったら武昭君は1人なんだもんね……フワア……そろそろ寝よう?」

「うん……じゃあお休み圭……」

話を終えた2人は、そのまま眠りに着いた。

第4話 ソレカラ

圭と美紀が武昭の家に来て一週間程経って……

「圭、私の方は掃除が終わったよ。洗濯の方は？」

「これを干せば……うん、終わった」

圭が家の掃除、美紀が掃除とそれぞれ家事をしていた。

「ふう……後は「キャンー」そうだと太郎丸のエサだったね、ちよつと待つてて」

「それにしても……本当にアイツらからは見えてないんだね……」

圭が太郎丸に餌をあげようとしてると美紀が玄關の近くに行つて外を見た。

道路ではゾンビ達が歩いていますが美紀達には気づいていない様子だった。

「武昭君が私たちに危険が及ばない様にして【結界】を張つてくれたからね」「ブオン」

圭が敷地内から出ようと門の所に足を踏み入れると一瞬蜂の巣状の壁が見えて直ぐ消えた。

「その代わり私達もここから出られないんだけどね……」

「仕方ないよ……外はどうなつてるか分からないんだから……」

「うーす、ただいまーってどうしたんすか？2人共」

2人が落ち込んでると武昭が帰ってきたが……

「ねえ……武昭君？……」

「ん？どうかしましたか？圭先輩」

「うん……その子……どうしたの？」

背中にも眠った子供をオンプしていた。

「ああ……この子の事に関しては後で良いですか？……ちよつと辛い話もあるんで……

それに、この子も休ませたいんで」

武昭が子供を見せると圭が子供を受け取った。

「そうだね……じゃあ私が布団に寝かせてくるね」

「ええ、お願いします……太郎丸、お前も一緒に行つてやつてくれ安心させる為に良いか

？」

「アン！」

「そうか……なら頼んだぞ」

太郎丸は武昭に頭を撫でられると圭と共に部屋に向かった。

「それで武昭君……さつき言つてた辛い話つて何？」

「ふう……これを見てください……」

「え……コレって……そうか……」

武昭が美紀に見せた物はビニールに包まれたスケッチブックの紙切れで、そこには……

なめかわ小学校にいます。

たすけてください。

ごはんとお水ががしてます。

と書かれていた。

「それで……今日は時間が掛かったんだね……」

「ええ……それで行って見たら……いましたよ……理科室の薬品庫の中に……」（これは、この小説のオリジナル設定です）

「そっか……他に生きてる人は……いなかったんだね……」

「ええ……そしてゾンビ達になった先生達や子供達も始末してきました……美紀先輩……俺は間違った事をしてますか？」

「その質問の答えを私に答える事は出来ない……ただ私が言える事は武昭君がいたから、私や圭、太郎丸にあの子がここにいる事が出来てるんだよ……それだけは知ってて……」

「美紀先輩……ありがとうございます……じゃあ腹が減ったから飯でも食いましょう」

か」

「うん……今日は私が作るから……」

美紀と武昭はそのまま家に入った。

第4話 ソレカラ（裏）

圭と美紀が武昭の家で生活する事になって1週間程経ったある日の事……

「ふう、結構な数のゾンビを始末したな……けど……」

《ああ、普通に生きてる者はいないな……》

武昭は近くにあった公園のベンチでデイスと話していた。

「ここもちよつと前までは子供達が遊んでる場所だったんだけど……なつ！あくえん握炎!!」

武昭は後ろから近づいて来たゾンビに飛び上がって頭を掴むと、その手に火を発生させて燃やした。

「やっぱり火炎系が一番効くな……」

《その様だな、あやつらは呪術や魔術などの要因ではない存在だから……武昭!!》

「ああ！分かつてるよ！……つて……」

気配を感じて始末しようとした武昭は、そのゾンビが持っている物を見て動きを止めた。

「そうだな……そうすると……誰かがやってくれるからな……」

そのゾンビは少年で、その首には「小学校に生存者がいるなど」のメッセージが書か

れているビニールに包まれた画用紙が掛けられていた。

「もう良いんだ……君はもう休んで良いんだ……ホーリークロス聖架」

武昭がゾンビを抱きしめて呪文を唱えようと、足元に十字架が光りだしてそのままゾンビが消滅し、その場には画用紙だけが残ったので拾った。

「さてと、久し振りに母校に行きますか……お前の願いは俺が聞いてやるからな名も知らぬ後輩」

武昭はゾンビがいた場所を一瞥すると目的地に向かった。

暫く歩いて武昭は小学校に到着した。

「さてと……やっぱ子供達が多いな……お前らも被害者なんだよな……けど……」

武昭はゾンビを始末しながら中を探索した。

校舎内を探索していた武昭は理科室に到着した。

「ん？デイス……気付いてるか？」

《ああ、何らかの薬品の匂いがあるな……》

「あ……この人って……まだいたんですか……」

武昭が理科室に入ると見覚えのある先生が薬品庫の扉の前で命を落としていた。

「先生が薬品をゾンビ達に投げたのか……けど、そんなに効かなかつたみたいだな数

……ん？これは……」

《どうやらスケッチブックの様だな……この者は絵でも描いていたのか?》

武昭は先生の遺体の下にスケッチブックがある事に気付いた。

「いや、この先生は薬品庫の管理をしてたから必要無い物は置かない筈だ……けど……まさか!」

武昭はある事に気づくと薬品庫の扉に手を掛けた。

「これを書いたのが先生なら……もしかしたら……ハァー!」 「ガコン」

武昭は両手を籠の手に変えるとそのまま力で開けた、そして、その中には……

「やっぱり……どうやらギリギリだったみたいだな……回復^{ヒール}」

1人の女子児童がいたが軽く気絶していたので回復魔法をかけた。

「うん、顔色も良くなってきたな……だけど……」

《やはり、この者達は音に反応するみたいだな……》

理科室に音に反応したゾンビ達が集まっていた。

そして……

「先生……先生が命がけで守ったこの子は俺が守ります……だから安心して休んでくだ

さい……デイス^{コネクトマジック}」

《うむ……融合魔法発動……》

武昭が女の子をオンブしてデイスに何かを頼むと足元に赤と白の2種類の魔法陣が

浮かび上がり互いに逆方向に回転していた。

「行くぞ……《融合魔法ホーリーフレイア聖炎浄化》」

武昭がデイスと同時に呪文を唱えると魔方阵から白い炎が出現して集まっていたゾンビ達を全て焼き尽くした。

「ふう……先生……俺を恨むなら恨んでも構いません……けど、俺は自分がやれる事をしただけです……」

そういうと武昭は、そのまま小学校を出て自分の家に向かった。

第5話 ジッケン

武昭が小学校で少女を保護してから数日経った、ある日の事……

「それで武昭君は、瑠璃ちゃんのお姉さんを探しに行くの？」

朝食を食べながらこれからの予定を話していると圭が武昭に言った。

「ええ、俺ならそれなりに遠出出来ますから」

「けど、何処に行くの？ 目星があるの？」

美樹の質問に武昭は返答した。

「はい、瑠璃ちゃんの話を知っていると先輩達と同じ制服みたいなんですよね、そうだよね？ 瑠璃ちゃん」

「うん！ りーねーはお姉ちゃん達と同じ服を着て学校に行ってたよ」「ワン！」

武昭の横に座っていた瑠璃と太郎丸が返事をした。

「それで、少しの間家を空ける事になるので先輩達には瑠璃ちゃんと太郎丸をお願いしたいんですよ」

「うん、私は構わないよ 美樹も良いよね？」

「そうだね、私も良いよ……けどね武昭君、無理はしたらダメだから……」

「はい、分かりました……瑠璃ちゃん、俺は少しの間いなくなるけど、2人の言う事をちゃんと聞くんだよ？」

「うん……分かった……」

瑠璃は落ち込んでいたが武昭に頭を撫でられて笑顔になった。

そして、朝食を終えて、武昭は家を出る準備を終えていた。

「それじゃ、行つてきます……先輩達と瑠璃ちゃんだけなら食料は、まだ保ちますし、この敷地内から出なければゾンビ達から見つかからないんで」

「うん、さつきも言ったけど武昭君も気をつけてね」

「そうだよ、ちゃんとココに帰つて来る事」

「はい、分かりました……それじゃ行つて来ます」

武昭は2人に言うつと外に出た。

武昭は街中を歩きながら心中のデイスと話していた。

「うーん……デイス、このペースならどれ位で行けそうだ？」

《これならば、1、2時間と言つた所だな……ん？武昭、気づいているか？》

「気づいてるつて……ああ、少し空が暗くなつてきてるつて事だろ？多分、雨が降るなつて……ポツポツ来てるな……」

《そうだな、それとゾンビ達も動きが変わってきてる》

「やっぱり、ゾンビになっても元の間人だった頃の記憶があるみたいだな」

武昭が周りを見てるとゾンビ達が雨を避ける様な仕草をしてる事に気付いた。

「けど……近くにいたら……」
「パン！パン！」
襲ってくるのは変わらないみたいだな
！

武昭は近くに來たゾンビ達の頭を拳で殴って砕いていた。

「それと……コイツらは腐敗はしても活動停止が起こらないんだな」

《うむ、我が知るアンデッドの類は時が来れば勝手に朽ちていくものだがな》

「そうか……雨が本降りになってきたな……エアージェイト空気防布」

武昭が魔法を唱えると体の周りに薄い空気の壁が出来て雨を防いでいた。

「うん、これで濡れなくなったか……つと結構な強さだな」

《そうだな……それよりも早く目的地に行くぞ……》

「ああ、そうだな……ん？なあデイス……何かゾンビ達と同じ方向に向かってないか？」

《確かに武昭の言う通りだな……だが、向かっている者達は皆制服を着てるみたいだ》

「デイスの言う通りだな……そりゃ生前の記憶があるなら学生達は学校だろ……ん？何か嫌な感じがするな……俺も行ってみるか」

武昭はゾンビ達が目指す方向に向かった。

武昭がゾンビ達の向かう場所に着くと目的地でもあった【私立巡ヶ丘学園高等学校】と看板がありグラウンド内には多数のゾンビ達が歩いていった。

「おいおい、制服を見た時から何となくは思ってたけど予想通りだと……怖いもんがあるけど……な！」
雷サンダーシャベルン 槍!!!!

武昭は近づいてきたゾンビに短めの雷を発生させて始末した。

「へっ、中を見るにはコイツらを始末しといた方が良いみたいだな！デイス!!」

《ああ！分かっている!!》

「来たれ！流れ続ける水よ!!」 《来たれ！轟き鳴る雷よ!!》

《魔法接続!!：蒼水轟雷!!》
マジックコネクト そうすいこうらい

武昭とデイスが同時に魔法を唱えると右手に水、左手に雷がそれぞれ発生し、それと合わせると凄まじい威力が巻き起こりゾンビ達を始末した。

「ふう、久し振りに使ったけど特に問題は無いな」

《そうだな……ん？ 武昭、あの建物の中から変な気配を感じるぞ》

「変な気配って、なんだ？」

《うむ、ゾンビの気配はするのだがそれに普通の人間の気配が合わさった様な気配もするのだ》

「それって、もしかしたら感染してまだ間もないんじゃないか？デイス、それは何処からだ？」

《ああ、あの建物の下の方からだ》

「そうか……なら、言ってみるか……」

武昭はデイスが感じた気配の場所に向かった。

武昭がデイスの感じた場所に行くのと学校の地下空間だった。

「何で、こんな普通の学校にこんなデカイスペースがあるんだ？……それに……」

《ああ、誰かが開けた形跡があつたな……ん？武昭》

「分かつてる……何かがコツチに来てる……」

武昭が地下二階に降りると床が水浸しになっている中を誰かが歩いてる音がした。

「さてと……どんなゾンビが来るのかね……なっ!？」

そのゾンビを見た武昭には見覚えがあつた。

「まさか……佐倉……先生？……」

《その様だな……確か以前武昭が学校見学に来た時に案内してくれた者だったな……》

「佐倉先生……デイス、《アレを試してみるぞ》……」

《武昭……以前から言っているがお前がやりたいのなら好きにやれ……我はそれを手助けするだけだ》

「ああ……ありがとうなデイス……佐倉先生……水球牢」
アクアプリズン

武昭が床に手をつけて魔法を唱えると佐倉先生の体を頭だけを出して水の球が出来た。

「破龍変化……[ザシユ!]クツ……先生……まだ意識があるなら……俺の声が聞こえるなら……コレを食べてください……」

武昭は両腕を龍に変化させると右手の爪で左腕の一部を抉り落として佐倉先生の口元に差し出した。

《武昭、無理にでも口に入れろ……お前ならば問題はない……》

「そうだな……先生……すいません！」

「ガハッ!……ゴクツ！」

「よしっ!体内に取り込んだか!行くぞ!デイス!!」

《ああ!分かつている!!》

佐倉先生が飲み込んだのを確認すると武昭はデイスと共に魔法を紡いだ。

「我が血肉を取り込みし者よ!」《我が命を受け入れ悪しき者を浄化せよ!!》

《「破龍清華!!」》

2人が魔法を紡ぎ終わると水球が佐倉先生を全て飲み込み、その表面には龍の鱗模様が浮かび上がった。

「ふう……とりあえずは大丈夫だな……」

《ああ、だがこれが上手くいくかどうかはまだ分からないぞ》

「俺も理解してるよ……けど、彼女なら必ず上手く行く筈だ……」

武昭はデイスと話しながら水球の前で状況を見ていた。

第6話 メザメ

武昭が佐倉に自身の血肉を食べさせてから一晩経っており、武昭は近くの壁に背中を預けて眠っていた。

そんな中……

バシャツッ！ ドシャツッ！

近くに合った水の球が割れて中にいた佐倉が出て来たが体の傷は治っておりゾンビの様だった肉体は普通に戻っていた。

「ん……あれ？……私は一体……？そうだ！……え？なんで腕の傷が、それに体も……」

「ふわあ……何か音がすると思つたら佐倉先生でしたか」

佐倉が慌てていると声が出たのを見ると武昭が起きていた。

「えっ？えつと……あなたは……何処かで……」

「佐倉先生、以前来た学校案内の時はお世話になりました」

「学校案内って……ああつ！あの時の……確か、龍舎君……だったわよね？」

「はい、そうです……それで佐倉先生……貴女は何処まで覚えてますか？」

「え？何処までって……確か……私は、あの子達を守ろうとして……そうだ……奴らに

「嘯まれた筈……けど……そうだ！なんで私は元に戻ってるの!？」

「佐倉は自身に起こった事を思い出して嘯まれた所を見るが完治していた事に驚いていた。」

「もしかして……龍舎君が何か……したの?……」

「まあ……詳しい事は話せませんが、今は『そうです』としか言えません……」

「龍舎君……分かったわ、けどいつかは話してちょうだい」

「分かりました佐倉先生……そうだ、俺も聞きたいんですけど……この建物内で……まともな人間は居ますか?」

「ええ、私がアイツらに嘯まれるまで一緒にいた子達が……そうだ！早く戻らないと!!」

「待つてください佐倉先生……今、外に出たらアイツらと鉢合わせするかもしれませんよ」

「そうかもしれないけど……だからって私だけがここに居る訳にはいかないわ!!」

武昭は佐倉を止めようとしたが、その表情に決意が見えた。

「優しいですね佐倉先生は……なら俺に任せてください……(デイス、この校舎内の探索は出来るか?)」

《ああ、この建物位なら問題はないぞ……》

「(そうか、なら……やるか……) 虚空に漂いし精霊達よ……」

「え？……龍舎君……それって……」

「まあ、俺は魔法が使えるんですよ……スピリットサーチ精霊探索」

武昭が右手を床に触れて呪文を唱えるとそこから魔法陣が発生し今いる場所の床全体に広がる光り輝いた。

暫くすると光が収まると同時に魔法陣が小さくなつていき消滅した。

「うん、生命エネルギーの反応は3つしますね……先生と一緒にいた子達と同じ人数ですか？」

「え、ええ……そうよ……丈槍由紀さんに恵飛須沢胡桃さん……それと……若狭悠里さんの3人ね……」

（若狭……悠里？……もしかして……ルーちゃんの……）」

「どうかしたの？龍舎君」

佐倉は武昭が何かを考えてる事が気になり声をかけた。

「いえ、ちよつと広範囲に魔法を使ったから少し瞑想してただけです」

「そうなの……龍舎君、あなたが魔法を使ったとしても無理でしたらダメよ」

「はい、分かりました 佐倉先生……とりあえずはこの調査をしませんか？」

「そうね……私も詳しくは見てないから、しての方が良いわね……そう言えば、ここにアイツらは……」

「いませんよ、さっきのサーチでも俺達以外の反応はありませんでしたから……じゃあいきましょか」

武昭と佐倉は一緒に地下区画の探索を行った。